



「佐賀ダルク」本格スタートに寄せて
佐賀ダルクを支援する会会長
国立病院機構肥前精神医療センター精神科医長
武藤 岳夫

「薬物依存症は病気です」「依存症は治ることはないが回復は可能です」

私は、アルコール・薬物を中心としたアディクション医療に携わるようになって10年が経ちましたが、この言葉を何度目にして、また自分でも何度言ってきたかわかりません。

それにもかかわらず、アディクション、もしくはその当事者に対する世間の目は厳しさを増す一方のように思えます。それは医療関係者も例外ではないようで、「いくら病気だからといっても、違法薬物を使うことは容認できない。通報すべきではないか」という声も多くあるのが実情です。

もちろん私も社会の一員ですから、一個人としては違法薬物使用を容認することはできません。では積極的に通報すればよいのか？厳罰化すれば事態は改善するのか？二度と薬物なんか使いたくないと思うくらいの辛い体験をすればやめられるのか？そうではないことは、多くの患者さんと話せば話すほど、私の中では明らかになっていきました。ましてや、最近では脱法ドラッグ、処方薬、ガスなど、司法的処遇の困難な薬物の乱用が増えつつあるのですからなおさらです。少なくとも医療関係者が、司法に丸投げする姿勢をとるのは有効とは思えません。「やめられない病気」として支援を考えていく方が有効であるように思います。

しかし、当然ながら医療も万能ではありません。そもそも、薬物依存症の治療を行っているところが非常に少ないですし、その少ない機関においても、依存症の治療成績は決して芳しいものではありません（何を治療評価の指標とするかは難しいところですが）。依存症は慢性疾患であり、規則正しい生活習慣をベースとして、回復に向けた息の長い取り組みが必要不可欠ですが、病気の性質上、どうしても焦ってしまったり自分自身の問題を認められなかったりして、つまずいてしまう人が多いように思います。こうした状況を考えると、多少回り道に思えても、ある一定の期間回復に向けて集中的に取り組める施設を必要とする人は少なからず存在し、そうした人に適しているのがダルクであろうと考えます。

薬物依存症に関連する問題は多岐にわたり、それに関わる機関も様々ですが、今やどの機関においても、支援や対策を考える上では、必ずと言っていいほどダルクの名前が出てくるはずです。それほどまでに、ダルクの役割は大きなものとなっています。

「〇〇ダルク」と名のつく施設は現在全国60か所以上存在しますが、佐賀にも2010年の10月に開設されました。これまでは様々な面で九州ダルクの力を借りる形で運営されてきましたが、いよいよこの4月から、独立運営となりました。全国のダルクでは、各地で特色あるプログラムが行われていますが、施設長の松尾さんは、まずは基本であるミーティングとNA参加を通して、基本的な生活習慣を作っていくことが必要と考えている、とおっしゃいました。私もその意見に賛成です。様々な治療技法や具体的なアドバイスも確かに有効でしょうが、寝食を共にするメンバーとの他愛もない話などで癒され、「今日一日」薬物なしの生活を送ることの尊さを経験することがまず重要で、特色あるプログラムは軌道

Drug Addiction Rehabilitation Center

に乗ってくればいくらでも作れるものと考えます（何より超田舎という、この上ない特色を持っていますから！）。

せっかく佐賀でダルクが本格スタートしますから、現在肥前で行っているプログラムなどの利用も念頭に置いて頂きながら、密な連携をはかっていければと考えております。今後の活動に大いに期待しています。

佐賀においては、薬物問題が身近にあることすら一般にあまり知られておらず、本当に助けを必要としている人にまだまだ情報が伝わっていない現状にあると思われれます。それは、佐賀県内の方から、当院や県の精神保健福祉センターへの薬物関連の相談件数が少ないことからわかります。そこで、佐賀ダルクの実施する事業の啓発と普及を促進し、併せて経済面での支援を目的として、有志にお声掛けして昨年7月に「佐賀ダルクを支援する会」を開設し、セミナーの開催や、会員確保につとめてまいりましたが、まだまだこれからといったところです。

現在、月に一回定例の会を開いておりますが、さしあたっての切迫した課題は何と言っても「資金の安定的確保」です。一人でも多くの方に、この会の趣旨にご賛同いただき、会員となっただきたく、いろいろ策を練っているところですが、依存症からの回復と同様、一歩ずつ地道にやっていくしかありません。今後もニューズレターや講演・研修などを通して情報発信していきたいと思ひます。佐賀ダルク同様、支援する会もぜひよろしくお願ひします。



「支援する会に入会して思うこと」
佐賀ダルクを支援する会副会長
団野総合法律事務所弁護士
団野克己

佐賀ダルクを支援する会（以下「支援する会」といいます）のメンバー団野です。現在、副会長をさせていただきます。

支援する会が発足して、1年近くになると思ひます。支援する会は、1か月に1回、支援する会のメンバーが集まり、支援する会の在り方や、いろいろな情報交換会をしています。午後7時から約2時間程度ですが、中身は濃いです。

私は、弁護士としてこれまで薬物問題に関わってきましたが、どちらかといえば、消極的なかわりでした。被疑者や被告人の弁護人という立場で、判決までは関わりますが、あとは知りませんという関係でした。ですから、わりと表面的なことしかみていなかったような気がします。

弁護士をしていて、薬物使用者の人たちに質問をします。その多くの人たちというか、全員が口をそろえて「もう大丈夫です。クスリは使いませんから。」と言ってくれて、私は言葉のとおり信用しました。でも、そのなかの多くの人たちは、いつのまにか使用者に戻っているのが現実でした。そんな中で、私たち弁護士は「どうして止められないんだろう。」と薬物の当事者を批判ばかりしていました。

でも、それでは解決できないのは当然だったんですね。大切なことは、当事者の立場になって考えてみることに。これは、いろいろな問題を考えるときに、もっとも大切なことだと思ひます。そして、だれでも知っている方法です。が、しかし、私にはそれができていませんでした。正直に言えば、クスリくらいいつでも止められるんだろうし、止められないのは当事者本人の問題だろう、と思ひていたこともありましたが、これが平均的な日本人の本音だと思ひます。

いま、わたしは薬物依存は病気だという認識です。病気ですから、ほうっておいては回復しません。適切な治療やリハビリが必要なのは当然とおもうようになりました。でも、平均的な日本人は、薬物問題が依存症という病気であることを認めません。その事実を否認しているといつてよいと思います。薬物依存は否認の病気といわれますが、一般市民の多くは薬物依存という世界を否認していると思うのです。

支援する会では、ダルクの皆さんが、回復のため行っている日々の活動や、回復途中にある当事者のいろいろな悩みなどを聞きます。私ははじめて知ることが多いです。

今年4月から、佐賀ダルクが実質的に活動を始めました。これは、支援する会にとって今年最大のニュースです。施設内に入居者を置いて、常時活動する施設に変わろうとしています。まだ、多くの人数を預け入れることは無理な様子ですが、少なくとも、佐賀でダルク施設が実質的な活動をはじめたことに変わりありません。

そして、ダルクが施設を運用するには、なにをするにも、先立つものが必要です。資金集めが、これから大きな課題になります。

支援する会としましては、一般市民の方、会社関係の方、多くの県民の皆様のご支援を仰ぎたいと思いますので、よろしくおねがいします。

佐賀ダルク 代表 松尾 周



佐賀DARCも新たな一步を踏み出しました。昨年度まで福岡の九州DARCから、佐賀へ通いながらミーティング場をひらいたり、電話相談や刑務所、病院へのメッセージ等の活動を続けてきましたが、4月1日より佐賀DARCへ常駐し活動を行っています。

九州DARCのメンバーが一人手伝いをしてくれながら共に生活し、ミーティング、朝のジョギング、食事作り、自助グループへの参加と、今までも続けてきた生活なのですが、新たな場所で新たな生活習慣を作り上げていくことが新鮮で、毎日の当たり前だったDARCでのミーティングが佐賀DARCでも行われるようになったのは嬉しいかぎりです。

昨年度から新聞の取材などにも取り上げてもらい、少しずつですが佐賀でのDARCの活動も知られるようになってきてはいたのですが、新年度初日にも電話相談から「どこに話を聞いてもらったらいいか分らなかった」と来所されその後、自助グループで涙ながらに話をされる姿や、薬が止まらないから死のうと思ったが刑務所の中で「佐賀にもDARCが出来た」と聞いたことを思い出したと訪ねてこられた方がおられたり、佐賀にもDARCが必要だったんだと改めて感じさせられます。

弁護士の方の依頼で拘置所への面会も数件入り、病院へのメッセージミーティングや講演の依頼等も頂き日常的に少しずつですが、忙しくなりつつあります。

しかし佐賀県では薬物依存症の問題はあまり表面化せず（相談する事で逮捕されてしまうのでは、世間に知られてしまうのではと）病気としての認識も低く、まだまだ家族の中で抱えられ苦しんでいる方が多いようです。

これまで以上に、薬物依存症に苦しんでいる多くの方々に、佐賀DARCのメッセージが伝えられるよう、そして回復のチャンスを提供できる場所として回復を目指す薬物依存症の仲間と共に今後も活動を続けていきたいと思っています。

多くの方に支えて頂けなければ、運営自体もおぼつかないような状態ですが今後とも佐賀DARCの関心を持っていただけたらと思います宜しくお願いします。



4月13日肥前精神医療センターデイケア棟において心理士の中島先生企画による、佐賀 DARC 独立応援企画「愛の味噌煮込みうどん」とバザーを開催して頂きました。

当日は、肥前精神医療センターの先生、心理士、作業療法士、看護師の方々、佐賀県精神保健福祉センターや薬物依存症当事者、家族の方々と多くの参加者に集まっていただき、愛知県

出身の依存症の仲間を講師に、皆さん人生初の手打ちうどんを打つことから始めました。参加者のほとんどが、味噌煮込みうどんを食べたことすらないという中で、講師の仲間が丁寧な味噌煮込みうどんの作り方、レシピ、ルーツの説明まで作ってくれ、生地をこねて、こねてひたすらこねて、麺棒で伸ばす作業も大勢でやると楽しくあちこちに笑いがこぼれる楽しいクッキングスクールでした。味噌煮込みうどんの、味はというと10年前に名古屋で食べて以来、口にしようと思っていなかった味噌煮込みうどんですが、愛が入っているとこんなに旨いんだと



先月まで、九州 DARC のニュースレターにスペースを頂き発行していた佐賀 DARC のニュースレター「むつごろう便」ですが、今年度からどうやって発送しようと資金難に苦しむ中、頭をかかえていました。

そんな中、赤い羽根共同募金会へ「平成 25 年度佐賀 DARC ニュースレター発行事業」として助成金の申請を提出していました、苦手な提出書類の作成も社会福祉協議会の担当の方に、相談にのってもらいながら…

先日、平成 25 年度「赤い羽根のつどい」において、NPO、ボランティア団体を代表し佐賀 DARC が、共同募金配分決定通知書を頂きました。

請求書類なども改め提出が終わり、これで多くの方々に佐賀 DARC のメッセージを運ぶ、ニュースレターが発送できるとほっとしています。

以前、DARC には何も無いぶん愛があると誰かが言っていました、何もなく困っていたぶん、会った事もない募金をしていただいた方々の愛を感じる機会になりました、大切に使用させていただきます。

心より感謝。

このニュースレターは、赤い羽根共同募金の配分金で作成しています。



お腹いっぱい食べ。(その日の夜もDARCで味噌煮込みうどんを食べましたが)

食事の後は、皆さんが持ち寄ってくれたもののバザーが開かれ、書籍や生活用品を買って頂き、残りをDARCへ献品して頂きました。

思いもよらないところで、DARCの活動に関心を持ちこのような企画をして頂いた事に、挨拶でも思わず言葉が詰まりそうになるくらい感謝でした。

また、このような機会が多くの方と出会えればと思います。

そして、愛の煮込みうどんとバザーの売り上げをDARCの活動資金として献金して頂きました。

心からありがとうございます。



味噌煮込みうどんの作り方

- ① ボウル等に小麦粉100gに対して水43cc(加水率43%前後)を入れ数回にわけ混ぜます。*最初はハシで粉と水を切るように混ぜ合わせ、ダマが出来てきたら手でこね合わせます。
- ② 全体にムラのないように表面が均一にしてりてなるまで、10分程こねます。
- ③ 円柱状に整えてラップやビニール袋で覆い、常温で15分以上放置します。
- * 冷蔵庫に入れて1日置いても、さらにコシがでます。
- ④ 打ち粉をしながらい、麺棒で3mm程の厚さに均一に伸ばしていきま。その後、表面にしっかりと打ち粉して3つ折りにし、3mm程の幅で切り分けま。
- ⑤ 麺が切れないようにしながら全体に打ち粉をし、麺をほぐしま。
- ⑥ 鍋に水でダシパックを入れ火を掛け、沸騰後5分間煮だしま。
- (ダシは濃い目)
- ⑦ ダシパックを取り出し、味噌と調味料を合わせたものを入れます。(好みにより味噌、調味料を調節してください。)
- ⑧ 煮立ってきたら具を入れます。(ネギ1cm程で斜め切り、揚げ半分を1cm幅鶏肉は一口大)
- ⑨ 沸騰し始めたら、粉をはらい麺をほぐして鍋に入れ、ハシで麺と麺がくっつかないよう軽く混ぜま。
- ⑩ 強火で3~4分程ゆでま。(茹で時間は麺の固さの好みにより調節して下さい)
- ⑪ 火を止めて卵を入れ黄身を潰さないように軽く混ぜ完成です。

材料 (一人分)

スープ	
・水	600cc
・ダシパック(鰹、昆布、椎茸等)	2パック
・味噌 八丁味噌	大さじ3杯
*今回は手作り味噌を半分混ぜま。	
・鶏がらスープの素	大さじ1杯
・みりん	大さじ1杯
・砂糖	小さじ少々
麺	
・小麦粉(うどん用中力粉)	100g
・水(加水率43%前後)	43cc
具	
・本ネギ	30g
・油揚げ	1枚
・鶏肉	50g
・卵	1個